

## 全オーストラリア ロータリー青少年交換委員長会議 基調演説

(2005年8月4日ー7日、オーストラリア、キャンベラにて)

スタンハマーRI 会長特別代表

2005-2007年度 RI 青少年交換委員会

在日 RI 委員 近藤 眞道

(D2660 元 YEO 委員長)

1942年オーストラリア空軍は、日本帝国主義によって侵略・占領されていたラバウルの日本軍を撃つべくオーストラリア本土を飛び立ちます。そのラバウル日本軍基地爆撃で対空砲火を受け失明した一人のオーストラリア兵士がいました。戦後ロータリアンになった彼の脳裏に浮かんだのは「二度とこのような悲劇が繰り返されてはならない」という思いでありました。1958年に日本国・東京で開催されたロータリー国際大会に、彼は盲目というハンディーをこえて日本にやってきます。彼の目的は日豪の青少年交換を始める事でありました。次の時代を担う日豪の若者を育てることにより戦争の悲劇を乗り越えたい、との彼の思いがそこにあったのです。その思いに答えて日本・D270久留米ロータリークラブがオーストラリアに学生を送ることを決めます。しかし物事は簡単ではありませんでした。かつての敵国日本より学生を受け入れることに彼のクラブでは大きな反対があったのです。彼は反対するロータリアンをひとりずつ説得しました。そして、その学生を受け入れる同意を得る事に成功するのです。1962年、彼女はオーストラリアにやってきます。彼女の名前は 宮崎洋子、久留米信愛女子高等学校の一年生、16歳。そして、彼女を暖かく受け入れてくれたロータリークラブ、それは **Rosebud Rotary Club, D9820 Victoria Australia** であります。そしてこの交換を実現した盲目のロータリアン、彼の名前はドナルド・ファークハー。日豪ロータリー青少年交換学生の第一号であります。

2005年現在過去15年間で日豪間で交換された長期交換学生は合計1459人、日本が交換している49カ国、合計8656人の中ではアメリカの3404人について第2位になっています。RI本部のデータによると年間交換される長期交換学生は年間約7000名、日本が関係する交換は約10パーセント、そのうちの17パーセントがオーストラリアとの交換です。一人のオーストラリアのロータリアンの思いがこのように大きな実績となって日豪間を結ぶようになったのです。

今年のRI スタンハマー会長のテーマは「**service above self**」。ロータリーの101年最初の年にふさわしいタイトルです。100年前に始まったロータリー、その設立の精神に立ち戻って、「ロータリーとは何か』『ロータリーはどうあるべきか』を将来に向かって考え、そして、行動する

新しい一歩となる年であります。

青少年交換プログラムがロータリーの正式プログラムとして認知されたのは1972年。毎年国際大会前に開催される YEO Preconvention も1991年のメキシコ大会で RI 本部からの誘いで、Rotary International Convention の Preconvention として認知されたのです。それ以前はソウル大会まで全ての大会において、会場の設営・登録業務・会議の内容に至るまですべて RI 本部の手助けなしに YEO が自らの手で国際大会が行われる同時期・場所で『International YEO Meeting』として開催してきたものであります。特に EEMA(ヨーロッパ・地中海地域 YEO Meeting)は、RI の YEP [青少年交換プログラム] より歴史は長く今年9月に開催されるベルリンでの大会は第53回大会になります。

このように長い歴史を持つロータリー青少年交換プログラムではありますが、ロータリー101年に当たり、もう一度原点に戻って「ロータリー青少年交換プログラムとは何か」「ロータリー青少年交換プログラムは本来どうあるべきか」を考えて見たいと思います。

ご存知の様にロータリーは世界最大の、そして最も権威のある奉仕団体です。飢餓に苦しむ人々に、汚染された水により8秒に一人死んでいく最貧国の子供たちに、戦争で傷ついた人々の心に安らぎを与えるために、津波や自然災害で家々を失った人々の自立支援のために、世界で多くのロータリアンが奉仕活動をしています。また、優秀な人材育成にも力を注いできました。世界初の女性国連難民高等弁務官の緒方貞子さんは日本で初めてのロータリー財団奨学生です。また、ロータリーは自分たちが属する地域社会でも活動をしています。我々の町を安全で自然豊かな町にするために多くのロータリアンが活躍しています。貴方の村で、街角でロータリーの歯車マークのついた標識をよく見かけることでしょう。ロータリーはこのように、自分以外の人々に、地域社会に、国家に、そして国境を越えて世界のいたるところで社会に貢献しているのです。

青少年交換もそれら多くのロータリー活動の一つです。でも、青少年交換は他のロータリー奉仕活動とは違ったところがあります。それは、このプログラムだけがロータリアンの師弟が参加できるのです。ロータリーは奉仕団体です。『奉仕』それは『自分以外の人々のため』の奉仕を意味します。 **THEY profit most who serve the best.** そこには自分たち自身への奉仕は含まれていません。しかし、青少年交換は自分たち、自分の子供たちへの奉仕が許されているプログラムなのです。なぜ青少年交換プログラムではロータリアンの師弟参加が許されているのでしょうか？ このプログラムの理念にその答えがあります。

実は、青少年交換プログラムはもともと我々ロータリアンのためのプログラム、ゆわゆる『身内』のプログラムから発生したものだからです。すなわち具体的にはこのような事です。わたし、Shindo Kondo のロータリーの友人がアメリカにいたとしましょう、そのアメリカ人の友人に私の

息子と同じような年齢の息子がいたとします。そこで、私とアメリカ人の友人との間で、互いに息子を一年間預かりあいをして、すなわち一年間子供を交換して、彼の息子を我が息子として育て、私の息子を友人が彼の息子として育てる。いわば、我々二人の息子たちを私の家族と友人の家族が互いに力をあわせて立派な大人に育てていく、それがローアリーの青少年交換の原点です。ですから、ロータリー財団奨学生を『留学生』と呼ぶのに対しローアリー青少年交換プログラムに参加している学生は、決して『留学生』とはいわず、『交換学生』或いは『Inbound』『Outbound』といいます。それに、交換学生は、夫々の受け知れ先で、それぞれの高校に通うわけですが、入学のための資格テストは原則としてありません。「留学生」であれば入学資格テストにまず合格することが必須条件のはずです。さらに興味深いことは、ロータリー青少年交換において、原則として受け入れ学生を受け入れ側の地区・クラブは選択が出来ない、と言うことです。学生を送り出す側が送ってくる学生を原則として受け入れる事になっています。これら全ての事柄が、ロータリー青少年交換プログラムが『留学制度』ではなく、我々の「子供預けあい」による「子供育てプログラム」を意味しています。我々ロータリアンの子供たちを我々ロータリアンが力をあわせて育てる、それが、ロータリー青少年交換の「本来の意味」であります。

私はロータリー青少年交換プログラムに関与して16年の日々が経過しました。我が家でホストした長期受け入れ学生は18名、短期交換学生を含めると23名になります。この6月末までポーランドからの女の子を5ヶ月ホストしましたし、今は **Canada** からの男の子が自宅にいます。私の家庭にとって、ロータリーの子供たちは家族の一人になってしまっています。

日本人の女の子に妊娠をさせてしまった来日男子学生。あるいは、ある夜、ホストマザーにバーベキューのスティックを突きつけ、家から飛び出し数日間大阪という800万大都市のダウンタウンを逃げ回り、警察に協力をあおぎ警察犬まで動員してやっと見つけ出したものの、発見された時は完全に狂乱状態、わめき散らす姿はまさに悪魔に取り付かれた形相、精神病院に入院、そして帰国させた女子。あるいは派遣国で教師をけってしまって帰国させられた日本からの男子生徒……問題を挙げれば切がないほど多くの出来事が私の脳裏をよぎります。

そんな出来事が起こった時、いつも問題になるのが、学生の資質。

「受入国に到着する前に、もっと受け入れ学生のチェックは出来ないのか」「派遣地区でのオリエンテーションはしっかり行われているのか」「もっと資質のいい学生を送ってくれるように要求すべきである」とか……

また、受け入れホストファミリーからは

『この子はいったい何のために、この国にやってきたのか！言葉も覚えようとしない、もちろん学校の勉強もしない。』あるいは、「せっかく遠い異国よりやってきたので、この国の文化や歴史を覚えてもらおうとしているので、一向に興味を示さない」とか「友達と遊ぶではなく、部屋にこもっ

てパソコンばかりやっている」等々・・・挙句の果て、『この学生は青少年交換学生として不適當であり、よって即刻帰国さす』ということまで起こります。

しかし、皆さん、もう一度よくロータリーの青少年交換プログラムの「本来の意味」を考えてもらえませんか？

ロータリー青少年交換プログラムは私たちの子供を私たちが互いに力をあわせ私たちの手で立派な大人に育て上げる、ということです。 私たちの子供、彼らの内には学力に優れた子供もいるでしょう、あるいは学力はそれほどでもなくとも、あらゆるスポーツに長けた子供、知的障害があっても心やさしく人を思いやることの出来る子供、逆に頭脳明晰であっても自己中心である子供、美人でとてもかわいい子もいればそうでない子供もいます。あるいは身体的障害を持っている子供もいます。ただ、重要なことは我が子が頭がよくても悪くても、美人であろうとも美人でなかったり、我が子がどのような子供であっても我が子は我が子です。貴方は貴方の子が勉強が出来ないからとか、部屋にこもってパソコンばかりをやっているからとか、あるいは付き合っている彼女に誤って妊娠させてしまったとかの理由で、親と子供の縁を切ってしまうのですか？ そうではないでしょう、たとえ我が子が問題児と周囲に言われても、我が子を愛し、我が子の幸せを願うのが親です。このことは世界のどこであろうとも、昔から変わらぬ親子の関係です。

ロータリーの青少年交換学生、彼らは我々の子供です。たとえかれらが色々な問題を起こしても、我々は彼らをすぐに切り捨ててしまうような事をしてはならないのです。彼らの両親のごとく、我々は愛情を持って、愛情を込めて、彼らを育てていく気持ちが大切なのです。そのためには、まず派遣(outbound)側のロータリアン、受け入側(inbound)のロータリアン、双方の関係者が共にその子の情報を開示し共有し、互いに考え・苦しみ・悩み・その子にとって一番いい方法を見つけ出すことが必要です。その結果として早期帰国(Early return)をさすことがその学生にとって一番いいことになる事もあるでしょう、あるいは、最後まで帰国させないことが一番その子にとっていいと判断を下すこともあるでしょう。最も大切なこと、それは、その子供の将来を見据えた一番いい方法を見つけ出してやること、これこそが『子育てプログラム』としてのロータリー青少年交換プログラムの『本来の姿』なのです。

その際最も重要になることが、受け入れ地区(District)と派遣側地区のロータリアンが、特に地区委員長[district chairperson]が、互いに深い信頼関係で結ばれていなければなりません。そしてその信頼関係・友情関係の太いパイプを中に、我々の大切な子供たちを乗せて、遠い異国の地に彼らを旅立たせるのです。子供の資質や派遣地区でのオリエンテーションのあり方を云々する前に、我々ロータリアンがまずやらねばならない事があります。それはわれわれロータリアンが互いに深い信頼と友情の絆で結ばれることです。「俺の友人の彼が日本であなたを待っていてくれるから」あるいは「俺の友人の彼がオーストラリアで君を迎えてくれるから」だから「安心して

行っておいで、きっとすばらしい一年になるよ」、そうロータリー交換学生に言いたいものです。

そのようにしてロータリアンの深い愛情で持って育てられたロータリー青少年交換学生、彼らはきっと将来、受入国・派遣国をつなぐ立派な国際親善大使（goodwill ambassador）となって世界の平和に貢献する大人に成長することでしょう。

あの、日豪青少年交換学生第一号、宮崎洋子君、オーストラリアの人々に愛され、オーストラリアの人々を愛した洋子、彼女はその後オーストラリア・カンタス航空の客室乗務員となって日本とここオーストラリアを毎日結びました。そして、そのカンタス航空に乗ってこの地にやってきた私、多くのオーストラリアのロータリアン、地区委員長、ガバナーやパストガバナーの心温まる歓迎を受けて今胸が熱くなるのを覚えています。

今年第2次世界大戦が終わってちょうど60年。私たちに日本人は多くのオーストラリアの人々に苦痛と苦悩を与えました。その事に対して私は一人の日本人として恥ずかしく、大変辛い思いをしています。それと共に、今ここにこのようにしてRI会長特別代表として皆様の前に来れるようにしてくれたあの盲目のロータリアン、ドナルド・ファークファー氏の平和に対する高い理想と情熱、そしてそれを実行に移した彼の勇氣に心から敬意を表したいと思います。

ご静聴ありがとうございました。